

# ビワ生育情報

千葉県  
平成29年3月号

## 平成29年2月の気象

平成29年2月の半旬別の気象は表1に示した。平均気温は第1、第4及び第5半旬で平年を上回り、第2、第3及び第6半旬で平年を下回った。月平均気温は7.0℃で、平年より0.5℃高く、前年より0.7℃低かった。

氷点下を記録した日は第1～第5半旬でみられた。月合計は8日で、平年より約1日少なく、前年より2日多かった。最低極温は第2、第3及び第5半旬で平年並みか平年より低く、第1、第4及び第6半旬で平年より高かった。

降水量は第2半旬を除く5半旬で平年より少なく、第3及び第6半旬では降雨がなかった。月合計は29mmで、平年及び前年の29%であった。

日照時間はすべての半旬で平年並みか平年を上回った。月合計は185時間で、平年の122%、前年の123%であった。

表1 平成29年2月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	気温(℃)			氷点下日数(日)			最低極温(℃)*		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	6.7	5.4	5.6	1	1.9	1	-0.2	-1.8	-0.2
2	5.7	6.5	5.6	1	1.7	2	-1.3	-1.3	-0.8
3	4.9	6.7	11.1	4	1.7	1	-2.7	-1.3	-0.2
4	10.0	6.1	7.9	1	1.5	2	-0.6	-0.8	-0.8
5	8.2	7.0	7.5	1	1.2	0	-1.5	-0.5	0.1
6	6.0	7.5	8.5	0	0.7	0	1.0	0.8	0.7
平均/計/最低値	7.0	6.5	7.7	8	8.7	6	-2.7	-2.8 <sup>*2</sup>	-0.8

※：各半旬又は2月中に記録した最低気温

※2：過去30年間の最低極温の平均

表1 (つづき)

半旬	降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	5	12	0	41	29	22
2	17	16	2	29	28	32
3	0	11	13	48	27	17
4	1	26	71	27	26	33
5	7	21	6	26	26	21
6	0	15	8	15	15	24
合計	29	100	99	185	152	150

## 樹及び花房の発育(4月の作業は次ページ)

ビワの開花期は表2に示した。暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月4日で、平年より5日早く、前年より2日遅かった。「大房」が11月17日で、平年より9日早く、前年より3日遅かった。「田中」が11月7日で、平年より7日早く、前年より3日遅かった。開花盛期は、「楠」が11月26日で、平年より2日早く、前年より7日遅かった。「大房」が12月13日で、平年より7日早く、前年より9日遅かった。「田中」が12月3日で、平年より3日早く、前年より13日遅かった。開花終期は、「楠」が12月19日で、平年より7日早く、前年より13日遅かった。「大房」が1月9日で、平年より20日早く、前年より20日遅かった。「田中」が12月27日で、平年より13日早く、前年より16日遅かった。

花房の出蕾が3品種共に平年よりやや早く、10～12月の気温がやや高かった影響で、開花の進みは3品種共に平年よりやや早く進んだ。「楠」及び「田中」では1月には肥大した幼果も平年に比べてやや多くみられた。ビワの耐寒性は花より幼果の方が低いため、寒害を被りやすい状態にあったと考えられる。

表2 ビワの開花期（暖地園芸研究所）

品 種	開花始期(月.日)			開花盛期(月.日)			開花終期(月.日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11. 4	11. 9	11. 2	11.26	11.28	11.19	12.19	12.26	12. 6
大房	11.17	11.26	11.14	12.13	12.20	12. 4	1. 9	1.29	12.20
田中	11. 7	11.14	11. 4	12. 3	12. 6	11.20	12.27	1. 9	12.11

平年：昭和61年～平成27年の30年間の平均

3月1日時点のビワ幼果の生存率は表3に示した。なお、「大房」については、幼果の発育が遅れていたため、調査が出来なかった。樹冠外側の生存率は「楠」が58%、「田中」が65%であり、2品種共に平年より低かったが、前年より高かった。樹冠内側の生存率は「楠」が57%、「田中」が74%であり、2品種共に平年及び前年より低かった。樹内外の平均生存率は「楠」が58%、「田中」が69%であり、2品種共に平年より低かったが、前年並みであった。本年度は、樹冠内側の幼果も被害が多くみられる。

暖地園芸研究所では、2月28日までに最低気温が-3℃以下を記録した日が1日あった。本年度のビワは、開花始期が早かったため、開花が早く終了した花（果）房を中心に寒害を被りやすい状態にあり、実際に気温の低下が起こったことで、寒害が多かったと考えられる。

花房内の幼果数は3品種共に平年よりやや少ない。果実の肥大は平年よりやや早く進んでいる。萌芽の展葉も平年よりやや早く進んでいる。本年の果樹カメムシ類の越冬量は、南房総市他県南地域で中発年と同様の傾向を示すため、今後の発生予察情報を参考にす。また、カメムシの発生が例年多い園では、4月以降、ビワ園への飛来に注意を要し、千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従って防除を行う。

表3 ビワ幼果の生存率（暖地園芸研究所）

品 種	樹冠の外側(%)			樹冠の内側(%)			内外の平均(%)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	58	65	19	57	93	99	58	78	59
大房	—	82	55	—	95	95	—	87	75
田中	65	82	47	74	96	95	69	89	71

調査日：平成29年3月1日

平年値：平成10年～平成28年の19年間の平均

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

#### 4月の作業

4月になると平均気温が一段と高くなって枝葉・根ともに伸長が盛んな時期になり、果実の肥大も急速に進む。3月に続き、摘果・袋かけが重要な作業になる。

##### 摘果・袋かけ

寒害を受けやすい園では、幼果の生死の判別がしやすくなった頃から摘果を始める。果形が細長いもの、果実肥大が均一でないもの、果皮に張りが無いものは被害果の可能性が高い。被害果の発生が多い園では、被害が比較的少ない樹冠の内側の幼果を多く残すようにし、収量低下を抑える。

##### がんしゅ病の予防

千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従って、幼果期までに銅剤を予防散布する。その際、幹や枝にも薬液が十分にかかるようにする。

##### 除 草

春草が繁茂する時期になるので、収穫が始まる前に除草を済ませる。草生栽培園では、有機物を補給する意味で草を刈り取って樹冠の回りに敷くとよいが、労力の足りない場合は除草剤を利用する。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiku/index.html>